

第 19 回 途上国における社会政策および社会計画

はじめまして。現在ロンドン大学の一派である London School of Economics and Political Science: "LSE" で修士課程に所属しております古賀と申します。LSE で途上国開発を学べる学部としては DESTIN (Development Studies Institute) と Social Policy Department が挙げられます。今回は Social Policy Department の中でも、自分が所属している MSc in Social Policy and Planning in Developing Countries ("SPPDC") についてご紹介させていただきます。あくまでも個人的な見解に基づいた記事ですので、公式情報をお求めの場合は <http://www.lse.ac.uk/> をご覧ください。また、今年 SPPDC のコース・コンピナーを務められている Dr. David Lewis からも SPPDC に関する個人的なコメントおよび "Formal Details" をいただきましたので、最後に紹介させていただきます。忙しい中協力してくださった Dr. David Lewis、また、本文に対するコメントや添削を快く引き受けてくれた鳴海亜紀子さん(同じく LSE・SPPDC 在籍)に、この場をお借りして御礼申し上げます。

【SPPDC の雰囲気】

LSE というと、ビジネス、経済、ファイナンス中心という印象を受けられる方が多いかもしれませんが、SPPDC では、いわゆるアンチ・キャピタリズムというスタンスで授業およびディスカッション(セミナー)が進められます。SPPDC は、MSc in NGO Management という別のコースに所属する生徒の大多数とコア(必須)のコースを一緒に選択することもあってか、生徒も教授もどちらかというと「NGO より」で、経済学にもとづいた開発政策に批判的な立場をとる傾向が見受けられます。数字だけでは捉えられない開発のあらゆる側面をできる限り多様な「レンズ」を通して分析することが奨励される雰囲気だと思います。生徒は 50 人ほどで、途上国を中心に約 30 カ国から集まっています。NGO はじめ国際機関、政府、メディア、private sector などでの職務経験を豊富にもつ生徒が多く、ディスカッションは自分の経験を文献とリンクさせながらすすめられます。個人的には、出身国を問わず皆知的レベルが非常に高いという印象を受けております。開発分野での職務経験のない自分にとっては、他の生徒の経験や意見から学ぶことが多く大変ありがたいのですが、時折圧倒されることもあります。3 人の教授が中心となって SPPDC の面倒を見てくれていますが、3 人とも威厳や肩書きにこだわらず、生徒と一緒にパーティに参加したり、催し物に子供をつれて参加してくれたり、「Dr. ... なんてやめてくれ。ファーストネームでいいよ」という感じで、非常にフレンドリーです。

【科目選択について】

基本的に必須科目(コア)の "Social Policy, Planning and Participation in Developing Countries" 以外は、選択は極めて自由です。LSE 内のほかの学部からでも Tutor の許可をもらえば自由に選択できるようになっています。ただし、選択科目があまりにも開発とかけ離れている場合、説明を求められる場合もあるようです。卒業するには合計 4 ユニットが必要で、3 ユニット分の授業を選択し、残りの 1 ユニットは修士論文にあてられます。

【必須科目(コア)について】

コアの授業では、社会開発に重点をおいて社会政策と Development Intervention の関係をさぐりながら様々なトピックで授業が展開されます。全3学期のうち、第1学期と第2学期は合計20回のレクチャー(2時間)と19回のセミナー(プレゼン+ディスカッション:1時間半)で構成されています。今年は、社会政策と社会開発、貧困、Livelihoods、政府、マーケット、Civil Society、Policy Process、開発援助、貿易と貧困、PRSP、参加型開発およびコミュニティ開発、開発プロジェクト、ジェンダー、汚職、Rights-based アプローチ、migrationなどを学びました。また、これらのトピックとは別に Project Cycle Management(PCM)/Project Planning についても学習します。こちらは4回ほどの講義と2泊3日の合宿でPCMとプロジェクトの立案方法について集中的に学んだ後に、3000wordsのessayの提出が求められます。第3学期は、基本的に1、2回復習セッションがある程度で、あとは各自でテスト勉強をすることになっています。テスト勉強はひとによってスタイルが違いますが、多くの生徒が Study Group を組んでテスト対策をしています。また、時折特別講義があります。今年は5月6日に Robert Chambers 氏を迎え終日(9時~6時)特別セッションがありました。学業評価の比重は、前述の3000wordsの Project Planning エッセイ(LogFrame含む)が25%(3月提出)、テストが75%(6月)となっています。

【コア以外の選択科目について】

コア以外の選択は前述の通り、Tutorの許可さえもらえば学部を問わず自由です。SPPDCの生徒専用(他の授業も選択可)に用意されているものとしては、農村開発、都市化、ジェンダー、NGOマネジメント、初等教育(2003年および2004年は教授がサバティカルのため中止)、子供の権利、グローバリゼーションなどがあります。通年の授業は1ユニット、1学期で講義が終了する科目は-halfユニットとしてカウントされるので、組み合わせると2ユニットになるような選択をします。ただし、コア以外の授業は、その年のProspectusに掲載されている場合でもなんらかの都合でキャンセルになる場合があるので、ある特定のコースを目的にアプライされる場合は必ず事前に確認されることを強くお勧めします。実際に今年も、自分を含め多くの生徒が、「社会開発のための初等教育」という授業をとりたいと考えLSEに入学したにも関わらず、「あ、ごめん、今年はないよ」と言われ、様々な抗議や Institute of Education(IOE)との単位交換の要求もおこなったのですがそれも実らず、結局教育に関する授業を全くとれないという痛い思いをしています。イギリスの大学ではよくある話らしいので十分お気をつけください。尚、私は「農村開発」と「都市化」を選択しています。授業で教育がとれなかったため、卒論のテーマを初等教育に設定することにしました。

「農村開発(Social Policy for Rural Development)」は、第1学期と第2学期を通し合計20回のレクチャー+セミナー(計2時間)があり、評価は3000語のエッセイ(トピックは農村開発に関係あれば自由:4月提出)が25%、テスト(6月)が75%となっています。内容は、授業で Sustainable Livelihood Approach、Land reform、Agricultural extension、non-farm economies、Microfinance といったコンセプトを中心に学

び、その後セミナーにおいて生徒のプレゼンやディスカッションでケーススタディを使い、講義で学んだコンセプトの確認・批評を行う、という形をとっています。

「都市化(Urbanisation and Social Planning)」においては、レクチャーかセミナーかのどちらかが1週間に2時間、合計20回行われます。評価は農村開発と同様、3000語のエッセイ(トピックは都市化に関係あれば自由:4月提出)が25%、テスト(6月)が75%となっています。第1学期にコンセプトを中心に学び、第2学期にはHousing、環境、公共サービス(水道・ごみ収集など)などの具体的なトピックにコンセプトを適用しながら学びます。また、学内のウェブ上に設けられているディスカッションのスペース(「WebCT」)で毎週500wordsほどの投稿をするようになっており、実際のディスカッションではなかなか発言できない生徒の意見にも耳を傾けようという取り組みがなされています。

【修士論文について】

修士論文対策は早くて第1学期目から、遅くても第2学期目から始めます。毎学期最低でも2回Tutorとミーティングをすることになっており、その都度進み具合を話し合いますが、基本的には自主的にすすめることが要求されます。社会政策・社会開発という広域分野を扱うコースであるためか、自分の論文の内容と関係なく自分のTutorとなる教授が決めます。1人の教授が15人~20人の生徒をSuperviseする仕組みとなっています。個人的には、教授対生徒の率が低すぎる点に不満があります。これは他の開発のコースに比べ劣る点かもしれません。しかし、自分から積極的にオフィスアワーやメールを利用して教授にコンタクトするというオプションも与えられているので、教授から得られるヘルプの量および質は、結局自分次第でどうにでもなることも事実です。自分が書く論文の内容を専門分野とする教授がTutorとして割り当てられない点について不満を感じたこともあります。しかし、例え特定のセクターにおける論文であっても、SPPDCでは社会政策と開発という広い見識をもって様々な「レンズ」を使いながら自分なりにリンクを発見・模索することが求められているので、現在のTutor割り当てのシステムはコースの趣旨には反してはいないのかもしれないかもしれません。

自分の意見はあくまでも今年の経験に基づくものであり、例年のSPPDCを反映するものではございません。より普遍的なSPPDCの紹介には長年SPPDCを観察されてきた教授の意見が有益であると思いますので、コース・コーディネーターのDr. David Lewisにコメントをお願いしました。和訳すると語弊が生じる危険があるため、英文のままで紹介させていただきます。どうかご了承ください。

2004年5月9日

ロンドン大学

London School of Economics

MSc in Social Policy and Planning in Developing Countries (SPPDC)所属

古賀 美夕紀

(以下 Dr. David Lewis より)

MSc Social Policy and Planning in Developing Countries (SPPDC)

Linking the study of social policy with the study of development theory and practice, the MSc in Social Policy and Planning in Developing Countries (SPPDC) is the LSE's longest running development course, and recently celebrated its 30th anniversary!

The course was originally designed exclusively for those working within governments and development agencies in order to provide a professional Masters course which builds a link between theory and practice in social development.

These days, while the majority of our students are still development practitioners from 'the South', we also increasingly take other well qualified applicants who are seek to build a career in development work. Each year we accept about 50 students, usually from at least 30 different countries, most with work experience in governments, donors, NGOs and the private sector.

What makes SPPDC different from other MSc courses is (a) the highly diverse mix of students in terms of country backgrounds, experiences and ages and (b) the emphasis on both the theoretical and policy aspects of 'social development' as the central theme of the course.

Also, since the course is located in the LSE's Social Policy Department (the UK's top rated development in this field) students have the unique opportunity to link the study of social development issues in both 'developing' and 'industrialised' country contexts.

David Lewis
Course Convenor

FORMAL DETAILS

The programme aims to:

(a) provide advanced post-graduate education and training in the inter-disciplinary field of Social Policy in a research active environment, with particular reference to the context of 'developing' and 'transitional' country contexts and with an emphasis on bringing together students from a wide variety of backgrounds and experiences (to create an environment in which students can learn from each other);

(b) provide students (who normally come to the course with some professional experience) with the skills either to continue in the wide range of careers concerned with social policy and planning in developing and transitional country contexts (in government, NGOs, private sector or intergovernmental organisations such as the UN) or to engage in further academic research on these themes;

(c) provide SPPDC MSc students with a wide range of choice to assemble an inter-disciplinary post-graduate programme (drawing on option courses both within and outside the Department and a dissertation project) that meets their individual goals in acquiring theory and specific knowledge and skills which will assist them in their future work as researchers, policy makers or practitioners concerned with social policy, social development and poverty reduction;

(d) develop and improve students' analytical, organisational and planning skills, and enhance written and oral communication skills.

Programme outcomes: knowledge and understanding; skills and other attributes

Students who successfully complete the MSc programme should

(a) have an understanding of the historical evolution of thinking about social policy and development and of the major theoretical, methodological and policy debates relating to social policy and planning in both the academic literature and 'real world' of development practice;

(b) understand the links between political, economic, organisational and social/cultural variables which determine relations between states, markets and society and between global, national and local level structures in the policy process;

(c) understand the meaning of social science research methods and debates among those who work on development policy, the basic principles of the main types of data collection and analysis, and the approaches of participatory appraisal and research and the main planning tools (such as stakeholder analysis, the project concept note, logical framework analysis, gender planning etc, taught through a Project Planning component) commonly utilised by development agencies such as DFID, UN and NGOs.

(d) Have an advanced understanding of either interdisciplinary or disciplinary based knowledge relevant to their particular goals of work or further study derived from two or more specialised subjects (chosen with the approval of their supervisor from an approved list of post-graduate courses offered from within the Department and the School more widely.